

この度の、口語詩句賞の選考会において、林桂氏から現代俳句及び短歌の評価をめぐって、また杉本真維子氏からも現代詩の評価について同様の発言が相次いでありました。いずれも、今年で八十年を迎える〈戦後〉という歴史的なモメントに対して、揺るぎない見識に支えられた発言であり、私自身も再度考えるべき課題を与えられたものと感じています。

いま、日々の報道などで目にする世界情勢の大きな変化、また国内においてもいまだ終息の見えない原発禍や災害各地の状況…。何人もの識者が発言する、新たな〈戦前〉という言葉さえ、妙に生々しいリアリティを伴って、われわれに迫ってくるようです。

どこか大きな話になってしまったようですが、けっして無関係だと思わないでください。かつて、〈戦争が廊下の奥に立っていた〉という作品を残した俳人（渡邊白泉）が居たように、われわれの平穏に見える日常とシームレスなまま、そのような時代の危機は静かに忍びよってくるのではないのでしょうか。

しかし創作行為において、何も直截に〈危機〉を表象することはないかもしれません。口語詩句をめぐる自らの言語主体に引きつけて、いかに書けるのか。どのように書けば、より良い作品になるのか。今という時代と向きあうなかで、それぞれが個の言語主体としてオリジナルな表現が、きっとつむぎ出されていくはずです。

ところで、この場では〈口語〉という制約があります。〈口語〉に対する言葉は〈文語〉ですが、たとえば次のように考えたら、いかがでしょう。広大な言葉の世界の中にある〈文語〉の領域を円で囲み、それ以外は全て〈口語〉であると——。おそらく、〈口語〉の領域には、まだまだ未知の沃土が予想以上に広がっているのではないのでしょうか。

いささか前口上が長くなってしまいましたが、わたしが奨学生に推した作者と、その作品について短評させていただきます。いずれも、これからの〈可能性〉に開かれた作者だと考えます。そのため若干、辛口になりますが、今後の要望を含めて記します。

さいう（石川県）

- ・かいじゅうの／ように／驟雨をなぎたおし／きみの待つ駅まで駆け抜ける
- ・まみどりのひかりに溺れながら往く理学部棟の床やわらかい

作者の才質については、すでに口語詩句賞の大賞選評で述べているので、ここでは少し要望を。自己限定した世界において、魅力的な直喩を駆使する作者であるが、今後は自己模倣などに陥らないように、自らの世界から一步踏み出すことを含め、たえず表現を更新しつづけていって欲しい。

松下 誠一（東京都）

- ・生きたまま雪を歩けるふしあわせ
- ・足あとの付かない森に来てしまう

自作を川柳と規定するだけあって、どの作においても意味を手放さない。現代を茶化するような批評精神を評価しながらも、ときおり感じるコピー表現（とくに、80年代の）と共有する口語使いには微妙なものを感じる。さらに、オリジナリティを磨きつづけて欲しい。

ムクロジ（群馬県）

- ・花束をほどけば寒月の欠片
- ・月冴えて二段ベッドに木の梯子

俳句と短歌の作者。いま俳句に絞れば、掲句ともナイーブで良質な素養を感じさせるものの、「ほどけば」、「冴えて」などを濫用すると、原因と結果の説明に陥りがち。もっと、さまざまな俳句文体を試みながら、自らのものにして行って欲しい。

奥井 健太（滋賀県）

- ・浮寝鳥戦争に布使われて
- ・本も食事も同じ机の花野です

俳句の作者。一句目、「戦争に布使われて」は発見があり、鮮度も高いが、「浮寝鳥」は如何だろうか。季語に囚われず、無季で書き切ってもよかったのでは…。二句目のような、季語に対する遊戯性また批評性に新鮮な可能性を感じる。無季俳句など、新たな領域にもチャレンジして行って欲しい。

雲理そら（大阪府）

- ・滅ぶとき、／たぶんあなたは光るだろう／そういう魔法が好きだったから
- ・車窓にもうつらない顔 桃のかご

ときに短歌は、あえかな批評性さえ宿し、一方、川柳では不思議な印象が後を引く作者。そんな繊細でありながら、柔軟な批評性をそなえた眼差しを大事に育てて行って欲しい。

azusa（京都府）

- ・月光が廊下を照らすボストンの／地下鉄の自販機の痛み止め
- ・ピアノって冷たい海だって思う

短歌では、ディテールへの眼差しとそこから生れる静謐な世界観に注目。また俳句には、喩的な連想から確かな実感が広がる。そんな詩的な美質を多作するなかで、さらに育てて行って欲しい。

金光舞（埼玉県）

- ・怪人の正体を知る初明り
- ・エクレアの空洞に住みたい師走

詩歌句とも創作する作者だが、ここでは俳句のみを。いずれも季語と取り合わせられているものの、ポップであっけらかんとした気配。そんな瑞々しい可能性を、さらに育ててい

て欲しい。

齊藤 栞（埼玉県）

- ・ 灯籠を流して過去がのびてゆく
- ・ 生理始まる寒卵手渡して

俳句では季語を活用しながらも、あまり既存のイメージに頼っていない。ときおり、驚くような取り合わせも。そんな才質を大事に、さらに育てて行って欲しい。

早瀬はづき（大阪府）

- ・ 川べりに腕をひろげて立っている／あなたはだれへ開かれた檻
- ・ あかねさす小さき虹を架けるため／あなたが浪費しつづける水

ほとんど短歌体の作者だが、くきやかな韻律の中で、ときおり批評的とも呼べる眼差しが光る。「開かれた檻」や「浪費しつづける水」など。そんな鋭利な眼差しを手放さないで、さらにオリジナリティを求めてつづけて欲しい。

以上、今回の奨学生に選抜された作者以外にも、次の作者たちに注目した。一作のみ上げることで、この度の責を果たしたい。

洋梨 またら（筆名）

- ・ 座席下見れば一昨年広島

玻璃（筆名）

- ・ 月冴えて移植のための家畜たち

秋山颯汰朗（筆名）

- ・ コーラ瓶／透かした先に焼死体

うたた（筆名）

- ・ ねむるとき／なにかに落ちて／ぼくたちは／うまれるまえのじかんを生きる

さほ（筆名）

- ・ QRコードに迷い込んだ犬